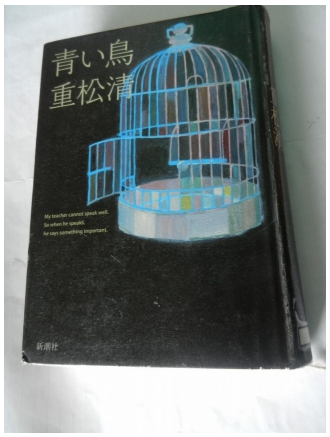
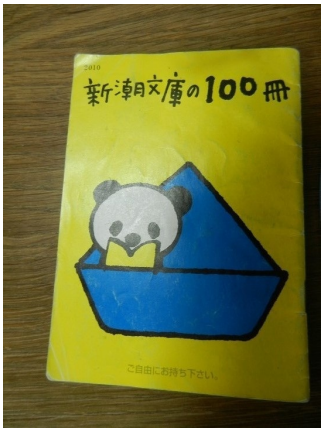
重松清自選名作名文集

ユニ子

青い鳥





1.本の紹介

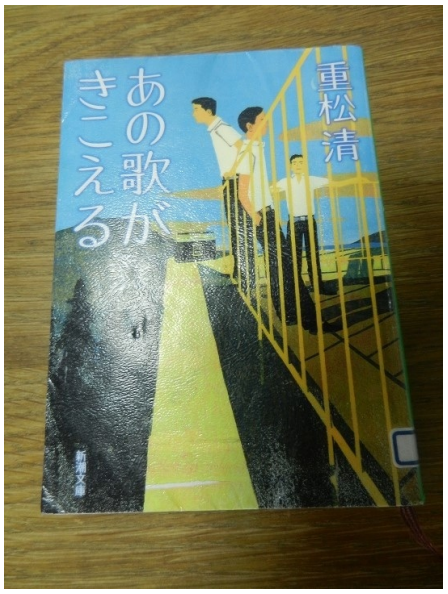
　この本は2008年に阿部寛さんを主演に映画化されその二年後、『新潮文庫の100冊』という冊子で紹介されました。短編集なのですが、どの話にも中学校に勤務している対象の非常勤講師の先生が出てきます。そのこともあって、主人公は最後の話を除いて全員中学生です。最後の話は、その先生に教えてもらっていた元・中学生が主人公です。この先生は授業をするだけではありません。それぞれの学校で何かを抱えている生徒と交流をして、本当に大切なことは何かを伝えていきます。この本で青い鳥がどのような位置づけをされているのか、ぜひ気になる方は読んでみてください。ひとりぼっちで過ごしている方も読めばきっと、元気が出ます。
（ISBN：978-4-10-407507-2　価格：本体1600円＋税（ハードカバー））

2.名文

『いじめはひとを嫌うからいじめになるんじゃない。人数がたくさんいるからいじめになるんじゃない。ひとを踏みにじって苦しめようと思ったり、苦しめていることに気づかずに苦しくて叫んでる声を聞こうとしないのがいじめ』

　これはこの本のタイトルにもなっている『青い鳥』という話の中で先生が述べている言葉です。この話に出てくる中学生の主人公は同級生へのいじめを防ぐことができず、結果的にその人を転校へと追いやりました。その後学校が様々なことをしていじめがない学校を目指しています。そのことに嫌気が差した主人公に先生がこのようなことを言いました。これが主人公をかばっているのか、褒めているのかは詳しく書かれていません。この話はいじめという重いテーマです。この話にはどのような考えからこの言葉が生まれたか書かれています。いじめで悩んでいる人はもちろんいじめをしている人にも読んでほしいです。

あの歌がきこえる



1.本の紹介

　前回の作品と同様、今回も短編集です。この本は2010年に『新潮文庫の100冊』という冊子で紹介されました。前回の作品と違うのは主人公がどの話にも出てくるということです。前回の作品は軸が非常勤講師の先生ということもあり様々な学校に通う生徒が主人公でした。（最後の話だけは元・生徒です。）ですが今回の作品は表紙にも出ている三人の男子達がどの話にも出てきます。それぞれの話のタイトルは全て名曲のタイトルが使われています。この作品は彼らが中学生から高校生へと成長していく姿が描かれています。一昔前に青春を過ごした方にも今が青春という方にも楽しんで読むことができます。ハードカバーは出ていないので、文庫で読んでみてください。

（ISBN：978-4-10-134924-4　価格：本体514円＋税（文庫））

2.名文

『自分を飾るひとは、いつか、飾りつづけることに疲れてしまうと思います。皆さんも自分らしさを見失わずにいてください。たとえ百人中九十九人が振り向いてくれなくても、自分らしさを認めてくれるひとが一人いれば、そのひとは幸せなのだと思います。』

　この言葉は主人公達が高校二年生の時に来た教育実習生が最後の挨拶で話した言葉です。自分を飾ろうと必死になっている人をよく見聞きします。私も同級生に嫌われまいと偽りの自分を作っていたこともありました。皆さんの中にも同じような人はいませんか？自分らしさを潰して、嫌われないように偽りの自分を作っていませんか？必ず生涯に一人は、自分らしさを認めてくれるひとは現れると思います。今の人間関係に押しつぶされそうなほど苦しみを抱えている方はどうかこの本を読んでください。そうでない方も、主人公達三人の友情物語をぜひ読んでみてください。時代は昭和から平成に変わってもきっとこんな友人関係はどこの学校にもあると思います。

きみの友だち

1.本の紹介

　この本は2008年に映画化され、その六年後に『新潮文庫の100冊』という冊子で特集されました。前回の作品とは異なり、今回の話の軸は二人の女の子です。所々時間の流れと短編の順番が合わないところもありますが著者が上手に書いているので違和感なく読むことができます。『青い鳥』では吃音の先生が軸でしたが今回の話の軸の女の子は吃音ではありません。表紙の絵を見ても分かるとは思いますが一人はある理由で足が不自由になり、（本編でその理由は明かされます。）もう一人は腎臓が生まれつき悪いそうです。この二人、もしくは足が不自由な子と比較的近い関係にいる人を主人公にした話が収められています。女の子が主人公のように見えますが、男子が主人公になる話もあります。優等生や八方美人等様々な人が出てきます。友だちの本当の意味を知りたい人、友だちとの関係に悩んでいる人、親しい人をなくした人・・・。様々な人に読んでほしい一冊です。ハードカバーでぜひ読んでみてください。

（ISBN：978-4-10-405706-5　価格：本体1600円＋税（ハードカバー））

2.名文

『いなくなっても一生忘れない友だちが、一人、いればいい』

　これは腎臓が生まれつき悪い子が入院している時に足が不自由な子が言った言葉です。皆さんには友だちがいますか？その友だちがいなくなったとしても一生忘れないでいることはできますか？私達は友だちを多く作ろうと必死になって行動しています。一人ぼっちでいることを恐れて、一人しか友だちがいないことを恐れて行動しています。足が不自由な子も、そうなるまではたくさん友だちがいました。ですがその子たちは離れていきました。結局二人はお互いとだけ仲良くし続けました。お互いのことを大切に思うその心には胸を打つものがありました。私たちもこのような友だちを作る必要があると思います。友だちは、数を増やせばいい物ではないと思わせられるような一冊です。必ず中学校を卒業するまでに読んでください。

きよしこ

1.本の紹介

　この本は2012年に『新潮文庫の100冊』という冊子で紹介されました。この本は『あの歌がきこえる』と同様男子を主人公にしています。形式は短編集ですが全ての話に表紙の絵の少年が出てきます。『あの歌がきこえる』と違うのはこの本では主人公の少年が一人ということです。この少年は『青い鳥』に出てくる先生と同様に吃音を抱えており、更には父親の仕事の都合で転校を繰り返しています。この物語の中で少年は小学生から大学生まで成長していきます。『青い鳥』とは違って子どもが主人公ということもあり同じ吃音を抱えている人でもだいぶ違う話になっています。ですが、人と人の繋がりについて書かれているところは同じです。吃音を抱えている人・転校を繰り返している人・転校してきた同級生との付き合い方に悩んでいる人など様々な人に読んでほしいです。ハードカバーと文庫、両方とも同じ表紙絵です。
（ISBN：978-4-10-407504-3　価格：本体1300円＋税（ハードカバー））

2.名文

『転校生って怪獣みたいなものだと思うんだよな。』

　この言葉は主人公の通う中学校に転入してきた少年が主人公に話した言葉です。転校は、親が転勤族ではない限りしたことのない人が多いかもしれません。でも転入生がクラスに来た経験というのはあると思います。この言葉を言った少年は野球部に途中入部したものの他の部員からは疎ましく思われました。とは言っても主人公も中学校から皆と一緒に過ごしてきたので、一応は転入生です。でも一年生から部活動に所属していたので少年とは違い疎ましく思われませんでした。転校を私も二回したことがありますが楽しいものではないと思います。もしクラスや学年に転入生がいたら・・・と考えさせられる小説です。転校歴のある人はもちろんない人にも読んでほしいと思います。決して楽しい気持ちになれる名文ではありませんが転校生について適格に表している言葉だと思います。